The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「村」の中のインド : ポストコロニアル小説における「インド性」の表象
Author(s)	松木園, 久子
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46689
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	松木園（まつきぞの）　久子（ひさこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　19739　号
学位授与年月日	平成17年6月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	**「村」の中のインド－ポストコロニアル小説における「インド性」の表象－**
論文審査委員	（主査） 教　授　仙葉　豊 （副査） 教　授　木村　茂雄　　助教授　伊勢　芳夫

論文内容の要旨

「独立の父」マハトマ・ガンディーは「インドは都市にではなく、村落に生きている」と訴えた。この示唆的な言葉を手がかりとして、小論では1935年から1997年までに発表されたインド人・インド系作家による英語小説に描かれた「村」を通じて「インド性」を考察する。

植民地時代、都市部は政治、経済、教育等の中心地として発展し、西洋文化との出会いの場所となったが、村落部では外国人や外国文化に接触する機会も少なく、外の影響を受けない「インド的」な文化がより色濃く残っていた。またグローバリゼーションが進行している現代においては、都会の生活様式に「インド的」なものを見つけることは困難であり、伝統的な「インドらしさ」を求めるとき、人は都会よりも村に目を向けるだろう。

植民地主義体験も、直接支配者と出会った都会だけでなく村落部にもその影響を見出すことができる。たとえばガンディーは、自給自足の経済体制を崩壊され、何重もの搾取構造の最底辺に追いやられた村こそが、植民地支配の犠牲を象徴する存在とみなした。それは独立達成とともに消滅したのではなく、さまざまなかたちでインドの地に根を下ろし、現在なお人々の生活の端々にその痕跡を覗かせている。このようにインドの文化が「植民地化された時点から現在に至るまで、帝国主義のプロセスにさらされてきた」という観点から、小論のタイトルに「ポストコロニアル」という言葉を用いた。

そもそも英語教育がインドに持ち込まれたのは、植民地支配の支配の道具としてであった。その目的はイギリス人支配者と支配されるインド人の間の「通訳」となる階級を創り出すことだった。しかし、英語を通じて西洋の自由主義思想などに触れたインド人エリートは民族自治の意識に目覚める。インドの民族語だけでなく英語を用いて、民族意識を昂揚させる文学を生み出そうとする動きが起きてきた。植民地支配の現実を描くために、作家たちは都市に住む裕福な層ではなく、「村」に住む庶民の世界に目を向け始めたのである。

インドにおける英語の優位もまた植民地支配の終焉とともに終わったわけではなく、むしろ独立後も政治・経済から教育・文化面に至るまで英語の重要性は高まる一方である。特に全国から学生が集まる大学では英語で授業が行われるのが普通であり、ほとんど全ての学問において知識人の共通語となっている。民族語との関係においては、英語は今なおいわば「支配者」的立場にあるのだ。英語の運用能力が、その人の教育程度の指標となり、ひいては教育を受けることができる経済力をも示すものとなっている。背景にはインドの民族語の間には大きな違いがあり、そのい

ずれかを優先すれば使用者の間に多大な不公平が生じるという状況があった。結果として、連邦政府の公的な用途では英語の併用を認めざるを得なかった。

文学作品については、本格的な英語小説が登場する1930年代半ばから、インド人の識字率（1931年当時9.5%）や出版事情を考慮に入れれば、海外の読者を前提に創作していたと考えてよいだろう。英語作家たちは英語を通じてインドの外の世界を知っており、海外で過ごした経験のある者も多かったため、外部からインドを見る視点を兼ね備えていた。すなわちインド人作家が英語を用いてインドの「村」を描くことは、インドのエリート層が英語読者を意識して、村の人々すなわちインドの庶民を表象する行為なのである。この関係性自体が、植民地支配がもたらしたインド人の間の断層であると同時に、英語による創作活動はその間に橋を架けようとする試みともいえるだろう。彼らは作品に「インドらしさ」を求める海外の読者の要求を敏感に感じ取り、また自らも「インドらしさ」を生み出す役割を果たしているのだ。

小論の第1章ではまずガンディーと「村」の関係を見つめ直す。彼が生涯にわたって重視しつづけた「村」は、イギリス支配以前の理想郷であり、植民地支配の最も深刻な犠牲者でもあった。インド人の政治家からも忘れ去られた8割のインド人を主役にすることが、独立運動の鍵だと彼は知っていたのである。しかしインドの独立は、パキスタンとの分割を伴い、かつて平和を守っていた村を流血の惨事で染めた。その村から、ガンディーは死ぬまで離れなかったのである。

民族運動の盛り上がりとガンディーの呼びかけに、英語作家たちも呼応し、1930年代半ばには英語小説の創始者たるMulk Raj Anand、Raja Rao、R.K. Narayanの三大作家が登場する。第2章ではAnandとRaoの初期の作品をとりあげる。社会派作家と呼ばれるAnandは*Untouchable*や*Two Leaves and a Bud*で不可触民や労働者といった村に根強く存在する、被抑圧者の問題を取り上げ、由緒正しいバラモンの家庭に育ったRaoは*Kanthapura*で、伝統と民族運動を融合させる、村のバラモン社会を描いた。彼らはガンディーと同じく、若い頃に国外での生活を通して外からインドを見つめる視点を持っており、村に見られる「インド的な要素」を題材にしたのだった。

第3章では、R.K. Narayanの*Waiting for the Mahatma*、*The Painter of Signs*、*The World of Nagaraj*を取り上げた。Narayanは先の二人のように「インド性」を強調することもなく、どこにでもいそうな市井の人々の平凡な日常生活を描いた。一見凡庸に見える作品世界の中で、決して無知でも無気力でもなく、都会の人間が流布しようとする一義的な独立運動や産児制限といった活動に対して、自分たちの日常的な価値観に基づいて抵抗する村人の姿を映し出した。

第4章では、1947年のインド・パキスタン分離独立によって平和な暮らしを引き裂かれる村の世界に注目する。Khushwant Singhの英語小説*Train to Pakistan*とRāhī Māsūm Razā（ラーヒー・マースーム・ラザー）のヒンディー語小説*Ādhā Gãv*（アーダー・ガオン）を取り上げ、比較を試みた。*Ādhā Gãv*はイギリスの分割統治、パキスタンの建国によって、村人の間に宗教にもとづく敵対意識が植えつけられ、さらに独立後の土地改革によって長年培ってきた大地とのつながりを切断される様子を、豊富なエピソードとともに描き出し、*Train to Pakistan*では異教徒が平和的共存を保ってきた村が、他所での暴動や噂、宗教弾圧の歴史を想起することによって、「異教徒は敵である」というコミュナルな言説に取りこまれていく過程を、主に村人の心理的な面から追跡した。

第5章では女性作家Kamala MarkandayaとAnita Desaiの作品に焦点を合わせた。Markandayaの*Nectar in a Sieve*では女性の人生の厳しさと連帯の必要性、そして大地とともに生きる農民の喜びと悲しみのドラマが展開されていた。Desaiの*The Village by the Sea*は工場の建設によって漁場を奪われる漁村を舞台に、子供たちが新しい環境に適応する逞しさを身につける物語である。両作品ともに、都会へ出ることによって村を故郷と認識し、自然環境と家族の大切さに気づくという共通のストーリーが込められている。

第6章では、二人の移民作家、Nirad C. Chaudhuriの自伝とV.S. Naipaulのインド旅行記をとりあげた。彼らは植民地支配者の視点を内在化していると批判されることが多いが、ルーツを求めればインドの「村」に行き着く。しかしChaudhuriの故郷である東ベンガル地方は歴史の中でパキスタン、そしてバングラデシュという「異国」に消え、年季労働者としてトリニダードに渡った祖父の北インドの村はNaipaulにとって不可解な「闇の領域」に属した。このような状況にありながらも、村に口伝えで語り継がれる先祖の物語ある種のフィクションによって「村」と彼らは結びつけられていた。

第７章では、最近の女性作家 Arundhati Roy の *The God of Small Things* に注目した。因習深いケララ州の村を舞台に、不可触民、子供、女性に対する差別が、多重的な構造に焦点を合わせて、明らかにされていく。また小説の中のエピソードを唯一の解釈しかありえない物語としてではなく、さまざまな読み方を読者に託すような構成をとっている。これは、力あるものが作り上げる権威的な唯一の言説に対抗して、弱者の声を拾おうとする彼女自身の姿勢の表れでもある。

以上が小論の構成だが、これらの作品における「村」では、特に大地が「インド性」の重要な鍵となっている。農民の生活する農地であり、母性や女性にもたとえられる。工場がもたらす環境破壊や化学肥料による地質の損壊など、現代的な問題にも深く関わっている。農地の所有制度は小作農や地主の人生を左右し、国境線が引き直されることによって大地が引き裂かれ、未曾有の移民、故郷喪失者を生じさせた。常にそこにありながらも、多義的で、絶えず姿を変える――それが村を通して見えてくる「インド性」だといえるだろう。

論文審査の結果の要旨

松木園久子氏の『「村」の中のインド――ポストコロニアル小説における「インド性」の表象――』は、インドにおける英語によって書かれた小説を、1930 年代から現在に至るまでの 10 人ほどの作家の代表作を、「村」をキーワードに考察したものである。

第１章では、独立の戦略として「村」の概念を導入したマハトマ・ガンジーが取り上げられ、第２章では、植民地支配の道具としてもたらされた英語が、知識人たちの自己表現の手段になっていくさまを、M.R. アーナンドの *The Untouchable*（1935）、*Two Leaves and a Bud*（1937）、ラジャ・ラオの *Kanthapura*（1938）などを中心に分析されている。第３章では、R.K. ナラヤンの、Mulgudi という架空の村を舞台とした作品群がとりあげられ、第４章では、第２次大戦後のインドとパキスタンの分離を背景に、「引き裂かれた村」のテーマを、R.M. ラザーの『半分の村』（1966）や K. シンの *Train to Pakistan*（1956）などの「地方小説」と呼ばれる作品群を中心に考察している。第５章では、K. マルカンダーヤの *Nectar in a Sieve*（1954）や、アニータ・デサイの *The Village by the Sea*（1982）などの女性作家の、村における女性たちの生活を対象とし、第６章では、N.C. チョードリーの *The Autobiography of an unknown Indian*（1951）や、V.S. ナイポールの旅行記などの考察から再訪された村へのまなざしを分析し、最後の第７章では社会派作家アルンダーティ・ロイ『小さきものたち』（1997）の錯綜した差別と陰謀の物語について論じている。

「村」の概念の図式的なところがある点と、近代化を背景にした理論化の記述の面に多少の瑕疵はあるものの、テキストの有機的な分析には見るべきところが多い。1930 年代から現代にいたる、比較的長い期間のインドの代表的な小説を丁寧に読み解きながら、「村」という概念を軸に、縦横に論じた点を高く評価された。

以上により、本論文は、博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値のあるものと考えられる。